

4 研究開発の評価

(1) 評価手法の開発と成果

① 評価手法の開発

ア 学校設定科目「グローバルルサーチ」「創造応用 I L」 社会科学探究活動におけるパフォーマンス評価

1) 課題設定

			Step4
		Step3	
Step1	Step2	Step3	Step4
興味関心がある分野で「問い」を立てることができる。	研究対象を十分に理解しており、「問い」を明確かつ検証可能なものに設定することができる。	先行研究をふまえて課題を検証し、より適切な課題に絞り込むことができる。	社会的に重要かつその解決が有益な課題を、自らの課題として設定することができる。

2) 探究活動

			Step4
		Step3	
Step1	Step2	Step3	Step4
課題に対して、探究の方法が的確である。	課題に対して、先行研究を理解し、可能な限り一次資料にあたって分析できる。	課題に対して、多角的な視点をもって分析し、解決のための方策を筋道立てて考えることができる。	課題に対して、明確な因果関係に基づいて、十分に根拠のある提案を展開することができる。

3) 表現活動

			Step4
		Step3	
Step1	Step2	Step3	Step4
ポスターやスライドを有効に使える。	時間配分をふまえて、研究の起承転結を適切に説明できる。	目的と結論に一貫性があり、相手を納得させるように説明することができる。	発表内容を十分に咀嚼し、原稿に頼ることなく、自らの言葉を効果的に用いて説明できる。

イ 学校設定科目「創造応用 I S」 自然科学探究活動におけるパフォーマンス評価

1) 課題設定

			Step4
		Step3	
Step1	Step2	Step3	Step4
自然科学の現象に主体的に目を向け、課題を見つけることができる。	課題を明確かつ探究可能なものに設定することができる。	研究を進めながら、さらなる問いを立てることで、より適切な課題に絞り込むことができる。	自然科学的な視点だけでなく、その成果を社会に役立てることを見据えて、課題を設定することができる。

2) 探究活動

			Step4
		Step3	
Step1	Step2	Step3	Step4
課題を解決するための研究の方向性が理解できている。	課題解決に向けて適切な方法で実験および実習を行い、データを得ることができる。	得られたデータを分析するために、適切な方法でデータをまとめ、考察を深めることができる。	研究の進め方に一貫性があり、結論を導くうえで科学的な根拠に基づいて、論理的に主張が展開されている。

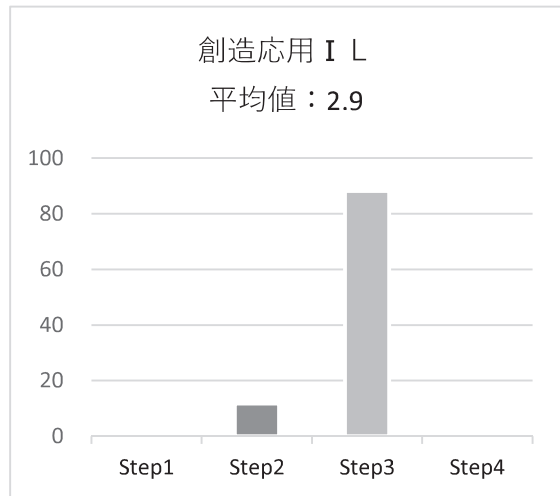
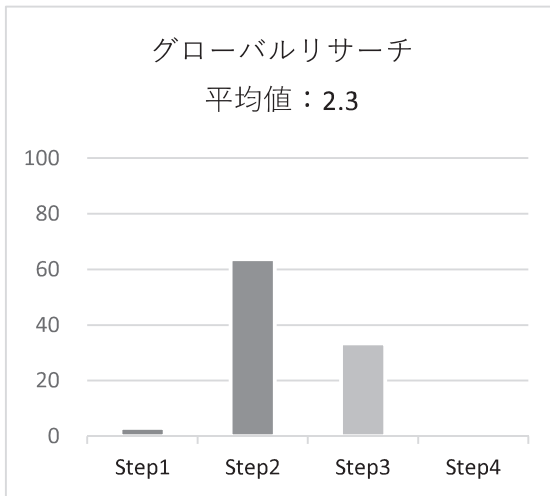
3) 表現活動

			Step4
		Step3	
Step1	Step2	Step3	Step4
ポスターやスライドを有効に使える。	時間配分をふまえて、研究の起承転結を適切に説明できる。	目的と結論に一貫性があり、相手を納得させるように説明することができる。	発表内容を十分に咀嚼し、原稿に頼ることなく、自らの言葉を効果的に用いて説明できる。

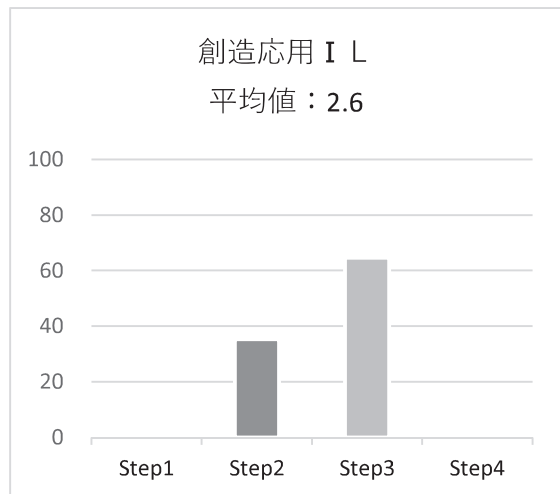
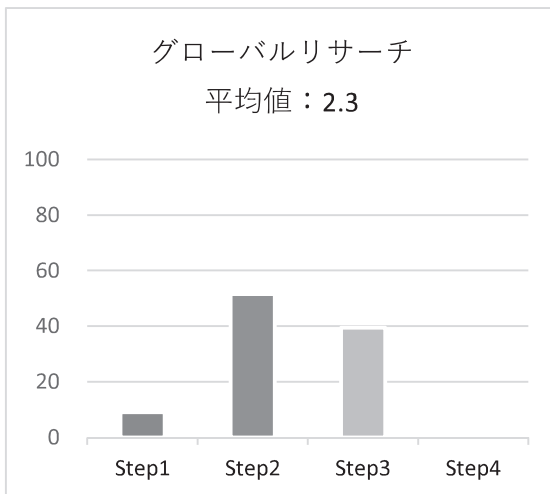
② パフォーマンス評価の実施 —生徒による自己評価—

ア 学校設定科目「グローバルリサーチ」「創造応用 I L」 社会科学探究活動におけるパフォーマンス評価

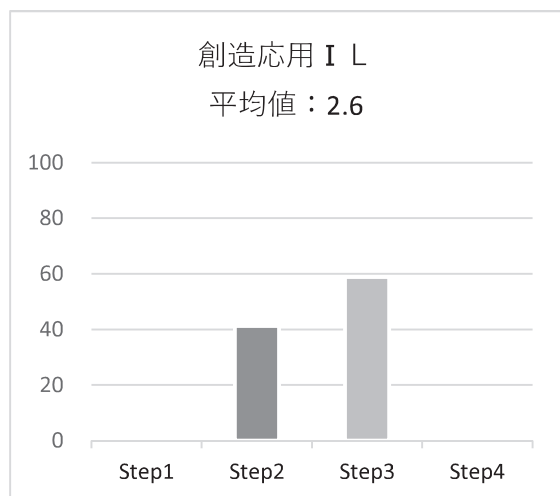
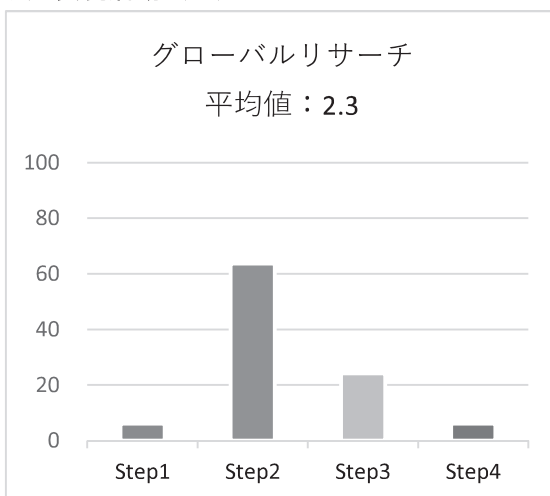
(ア) 課題設定 (%)



(イ) 探究活動 (%)

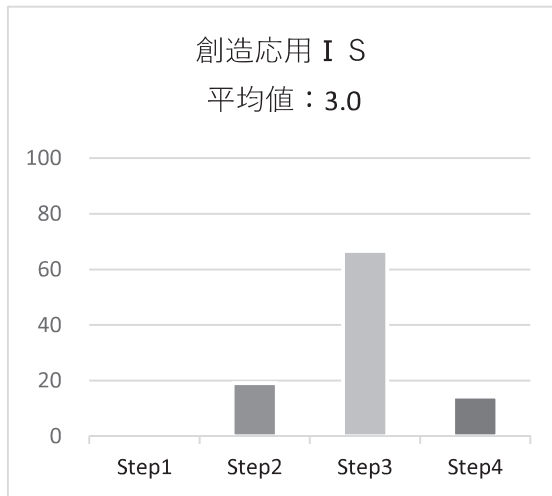


(ウ) 表現活動 (%)

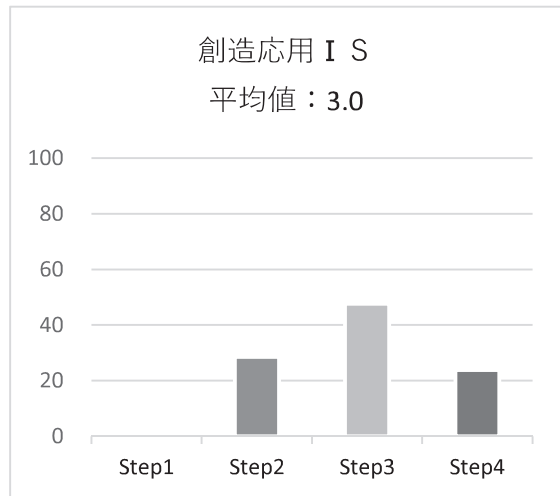


イ 学校設定科目「創造応用 I S」 自然科学探究活動におけるパフォーマンス評価

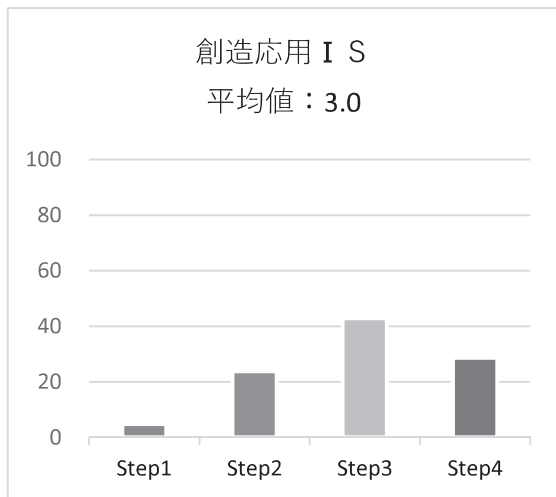
(ア) 課題設定 (%)



(イ) 探究活動 (%)

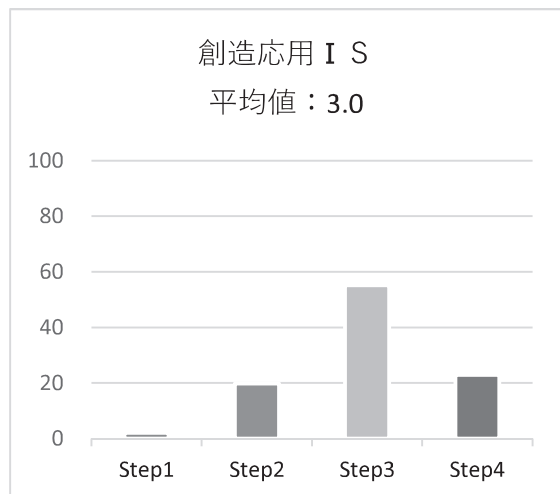
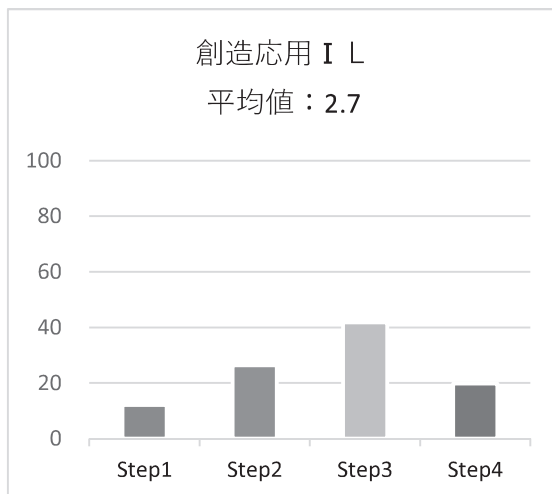


(ウ) 表現活動 (%)

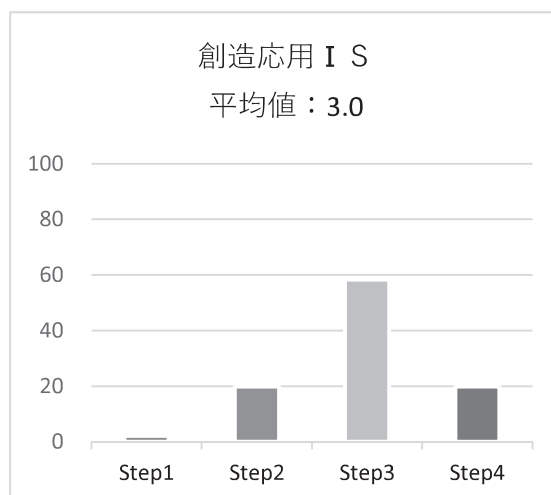
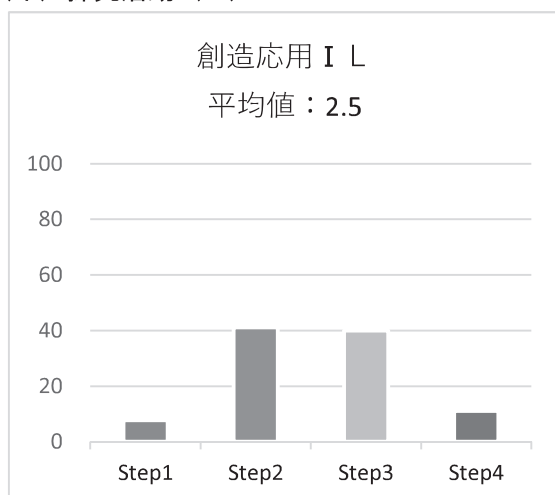


③ パフォーマンス評価の実施 — 教員による評価 —

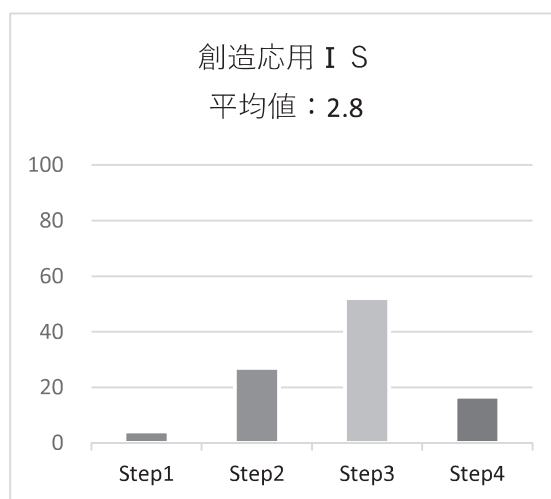
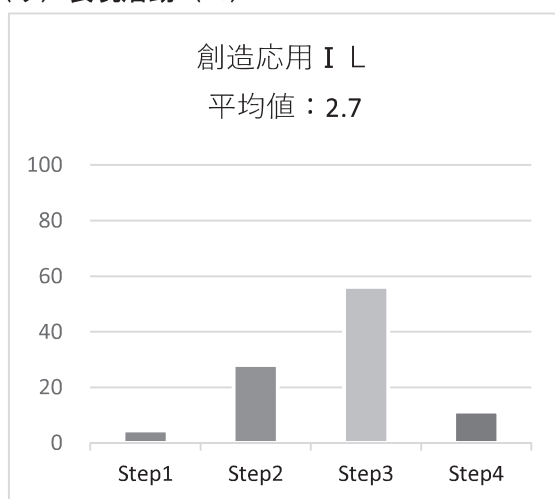
(ア) 課題設定 (%)



(イ) 探究活動 (%)



(ウ) 表現活動 (%)



④ 記述による思考力・技能についての評価実施

ア グローバルリサーチ受講生（3年）の自己評価（記述）

(ア) 身に着いた思考力

- ・ 物事を一方的な視点から考えず、その課題にかかわる人の立場によってさまざまな価値観があり、世間ではよいと思われていても正しいとは限らないことがわかった
- ・ ひとつの事実を色々な角度からの分析ができ、定められた制度の長所、短所を評価したり活用することができた
- ・ 大まかな課題の中からテーマを絞り込み、目的を考えながら効果的な解決法を複数考えることができた
- ・ 日本とは全く違う価値観を持った人たちの考えを推測し、それに合った対策を考えることができた
- ・ 教えられたことをそのまま鵜呑みにせずになぜ、どうしてと疑問に思い、自分でもう一度考えてから解決するまで先生や大学教授に質問することができた
- ・ たくさんのデータの中から自分の研究活動に合うものを選び出し、つなぎ合わせて考えることができた

(イ) 身に着いた技能

- ・相手の意見を聞いた上で、自分の意見を相手が納得するように組み立てることができた
- ・情報の取捨選択や自分の意見をまとめる力が身につく、データや資料をどう使うかということも考えることができた
- ・参考資料は個人のブログや抜粋されている部分ではなく、原本を使用しなければならないことがわかった
- ・論文を読み込み、それを活用したり、道筋を明確にしながら他人に論述できた
- ・どのような実験方法、比較対象、試薬を用いれば、より説得力がある発表ができるかわかった
- ・さまざまな分野の論文を数多く読み、その中から適切な情報を抜粋し、自分の研究テーマに沿って情報を引用することができた
- ・発表時には聴衆の目を見て、できるだけゆっくり、抑揚をつけて話し、専門用語などは理解しやすいようにかみ砕いて説明することができた

イ 創造応用 I L 受講生（2年）の自己評価（記述）

(ア) 身に着いた思考力

- ・自分で定義を決めるにあたって、どの資料のどの部分を見て判断することがわかった
- ・発信される情報を批判的に読み込み、複数の視点から問題を捉え、解決策を考えることができた
- ・多数の研究論文やデータをあたり、自分の研究に必要なものは何か考えることができた
- ・現状のデータだけでなく、なぜこうなったのか歴史、経済など様々な観点から研究を進めることができた

(イ) 身に着いた技能

- ・質問されたことに的確に答えられるように準備をすることができた
- ・自分が人に一番伝えたいことを整理することができた
- ・グラフや表を見やすいように、伝えたいことが一番伝わるように作ることができた
- ・相手に伝えることを第一に考えた発表をするために、見やすいポスターをつくるよう努め、専門用語においても軟化した日本語、英語を使うように心がけるようになった

ウ 創造応用 I S 受講生（2年）の自己評価（記述）

(ア) 身に着いた思考力

- ・アンケート調査の際には、地域・性別・年齢などグループ分けをして考えることができた
- ・「どんなときに使われているか（事例）」から「どういうものか（本質）」を理解し、オリジナルの「どんなときに使えるか」を考えることができた
- ・班の方向性とは違うが、思いどおりの結果にならなくてもこじつけずそれを結果として取り扱うことができた
- ・すぐに結果を決めつけるのではなく、様々な角度から結果をみて、実験の改善方法を考えることができた

(イ) 身に着いた技能

- ・簡易な模型を作成して説明することができた
- ・相手が求める情報はどこまでか、文理など相手の興味や知識によって説明を変えることができた
- ・何のためにその実験をしているかという思考過程を伝えて説明することができた
- ・長期にわたって記録したデータを提示することで実験結果に信頼性を持たせることができた

⑤ 評価結果の分析と成果

本校での教科「創造」における探究活動を、生徒の探究活動の「質」の面に着目し、段階的に生徒の資質・能力向上を「見える化」することを目的に評価シートを作成した。これは、研究段階と評価を一体化したパフォーマンス評価を開発したことにより、生徒は研究そのものに対して、自分の到達度と次の目標を理解させるものである。授業担当者は、グローバルリサーチの指導目標を Step1 から Step2 へ押し上げることに設定し、創造応用 I L と創造応用 I S の指導目標を Step2 から Step3 へ押し上げることに設定している。今回の評価の結果、その目標は概ね達成できたといえる。特に、創造応用 I L と創造応用 I S は課題設定に対して生徒、教員ともに評価が高かった。一方、本校の探究活動において身に着いた思考力と技能については、生徒自身が探究学習を通して得たものを整理し、記述した。特にグローバルリサーチの記述はより具体性のあるものになった。

まず、パフォーマンス評価は生徒の自己評価は概ね Step1 をクリアし Step2 以上の評価をしている。グローバルリサーチと創造応用 I L を比較すると、すべての項目で創造応用 I L がグローバルリサーチを若干上回っている。また、グローバルリサーチは表現活動で Step4 を自己評価する生徒が少数いるのに対し、創造応用 I L にはいなかった。これらの要因は、創造応用 I L の母集団の数が 18 名と少ないこと、また個人研究であったことにより、集団内での比較対照がしにくかったと推察される。一方で、教員による創造応用 I L 評価では Step4 に到達したと判断された生徒が多数おり、創造応用 I L の生徒は高い水準に達しているものの、Step1 に判定されている生徒もいた。グローバルリサーチは 33 名の受講生徒のうち、グループ内およびグループ間で他の生徒に比べ探究活動に真剣に取り組んだ生徒の自己評価が高く、そうでない生徒は評価が低いという点で差が生まれた。創造応用 I S も 28 名と母集団が多いことやグループ研究であることから、傾向としてはグローバルリサーチと同様と考えられる。創造応用 I S に対する教員による評価は、創造応用 I L よりも若干高い。これはグループ研究であるだけでなく、大学教員の関わりの密度など指導体制によるところもあると考えられる。

次に、本校の探究活動において身に着いた思考力と技能について、特にグローバルリサーチで充実した記述が多かった。思考力においては、多角的・多面的な見方が身につき、現状分析から課題設定し先行事例研究をもとに解決策の提案と、探究活動の一連の流れで論理的思考力を身に付けることができた。技能では、情報収集と選択、引用などの研究手法など、発表時のプレゼンテーションや質疑応答などの発表手法を身に付けることができた。これは、グローバルリサーチ受講生が過去の先輩に比べ、フィールドワークや実践活動、外部発表会などに積極的に参加したことで刺激を受け、さまざまな力を涵養してきたからだと考えられる。しかしながら、パフォーマンス評価において創造応用よりも平均値が低いことから、時間をかけて探究したり、グループ内での協力が必ずしも十分ではなく、成果としては高みには登れていないと感じているかもしれない。

以上から、グローバルリサーチはパフォーマンス評価では Step2 以上の自己評価をし、思考力・技能の定性的評価でも概ね資質・能力の育成ができたといえる。次に、創造応用 I L では、パフォーマンス評価では、自己評価と教員評価で概ね Step3 に近い成果が出ており、特に課題設定で高い評価となった。その一方で、他の項目に比べ探究活動で課題があるといえる。そして、創造応用 I S では、自己評価と教員評価で Step3 をクリアしている生徒が大半で、特に Step4 に到達している生徒も少なからずいることから、高い成果が得られたといえる。

⑥ 今後の課題

本校で開発したパフォーマンス評価の結果および、生徒記述の内容より、グローバルリサーチおよび、創造応用 I L、創造応用 I S において本事業の目標を概ね達成できたといえる。しかしながら、いくつか課題が残るため、以下の 5 点をあげたい。

第一に、グローバルリサーチに対する教員評価を今回十分に実施できなかったため、創造応用 I L と創造応用 I S との比較が不十分なものとなってしまった。というのも、創造応用の評価には本校教

員と大学教員、大学院生など 10 名以上が関わるのに対し、グローバルリサーチは本校教員 2 名と大学教員 2 名と小規模なため、個々の教員評価の影響力が高すぎるため、単純に比較できないからである。今後、グローバルリサーチの指導体制を改善し、より多くの教員が評価にかかわる仕組みが必要である。

第二に、パフォーマンス評価によって本事業の探究学習についてその達成度を測るにはある程度成功しているといえるが、本校の掲げる 4 つの力（科学的思考力・複眼的思考力・自律的活動力・社会創造力）を直接測定するものではない。パフォーマンス評価と 4 つの力との相関（研究開発実践報告書・第 3 年次 p. 102 参照）を定量的に測ることや、すでに開発したレーダーチャートと合わせて 4 つの力の伸長を示すことが考えられ、総合的に評価する仕組みを構築する必要がある。

第三に、パフォーマンス評価の Step4 に到達したと判断する生徒は非常に少なかった。Step4 は、文理を問わず幅広い教養をもとにした課題設定や信頼性のあるエビデンスにもとづく探究活動、聴衆に合わせた表現活動と極めて高度な目標設定をしている。これらを目指して生徒も活動を行っているが、パフォーマンス評価の結果からは、生徒にとってはこの段階に到達することは困難に感じているようである。教員評価では少なからず Step4 に到達していると判断されていることから、評価項目を生徒に理解させることがより求められるだろう。

第四に、平均値を比較すると創造応用 IS、創造応用 IL、グローバルリサーチの順に高いことから、本事業をもとに今後より充実した探究活動をするために、指導体制の整備こそが生徒自身の研究の成果よりも必要だということだ。先述した通り、創造応用 IS には本校教員だけでなく多くの大学教員が関わり、創造応用 IL とグローバルリサーチとの間に教員の数と専門性に大きな差がある。また、社会科学的な分析を要する研究では、自然科学研究に比べ、研究手法が多様で、教員の指導法や大学等外部研究機関への連携などで指導体制が充実しているとはいえない。こういったことから、高度な社会科学分野の探究活動において教員が生徒とどのように指導するのか、どのように外部機関と連携するか今後検討したい。

最後に、パフォーマンス評価の表現活動はおもにプレゼンテーションを対象にしているが、論文等のまとめについての評価項目がない。本事業の対象生徒は全員、探究活動の最後に論文を作成している。その評価は、担当教員が必ずしもその分野の専門ではないために、内容の評価が十分にできているとは限りない。当然、評価は指導と表裏一体のため、本校のように外部との連携により探究活動を実施する場合には、必ず成果物の内容についての評価が課題となる。外部発表会や学会参加により、専門家からの評価を得る機会を活かしながら、項目を追加できるよう今後検討したい。

(2) アンケート

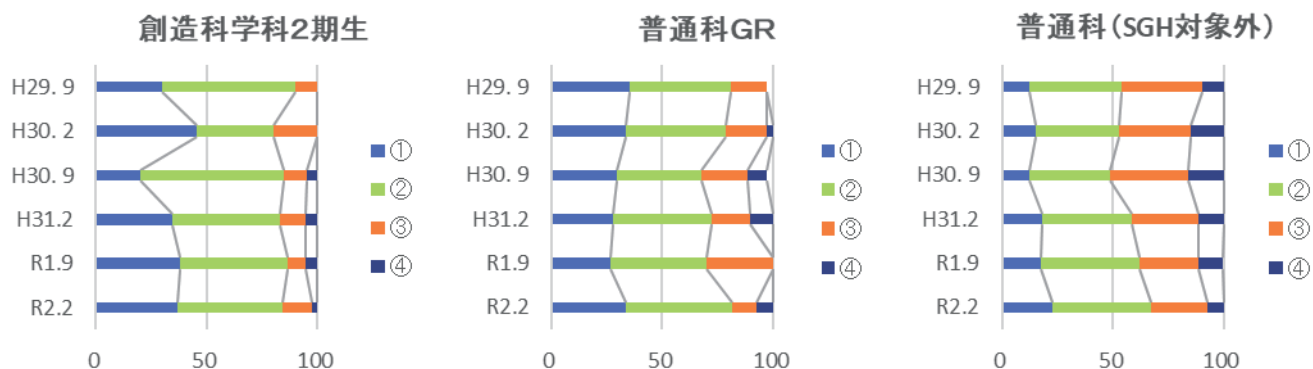
平成 29 年 9 月（1 年生時）から定期的に 6 回、現 3 年生を対象に実施した結果を比較した。
以下の質問に①～④の選択肢から答えさせた。

① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ あまりそう思わない ④ そう思わない

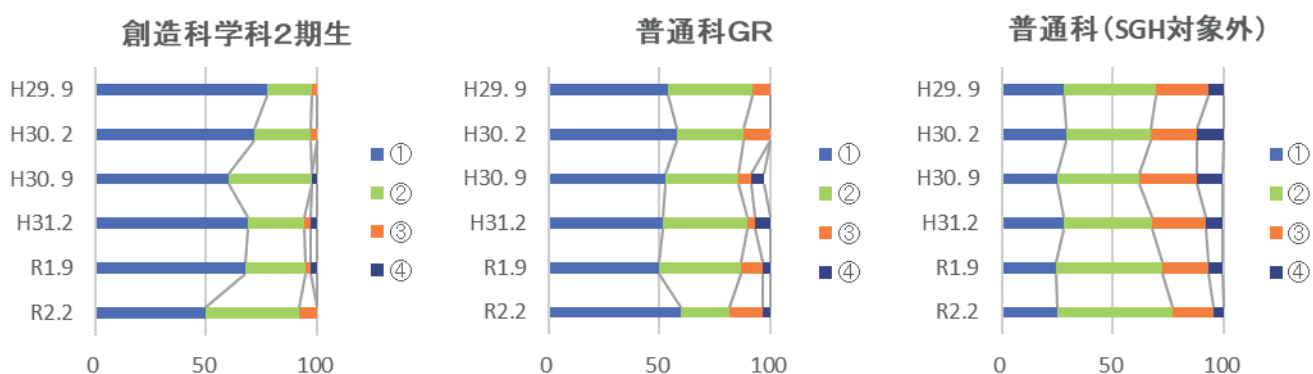
※ 創造科学科 2 期生：SGH 対象（40 名） 普通科 GR：普通科グローバルリサーチ受講生（SGH 対象）（40 名）

普通科(SGH 対象外)：SGH 対象外生徒（約 240 名） ※ 数値の単位は%

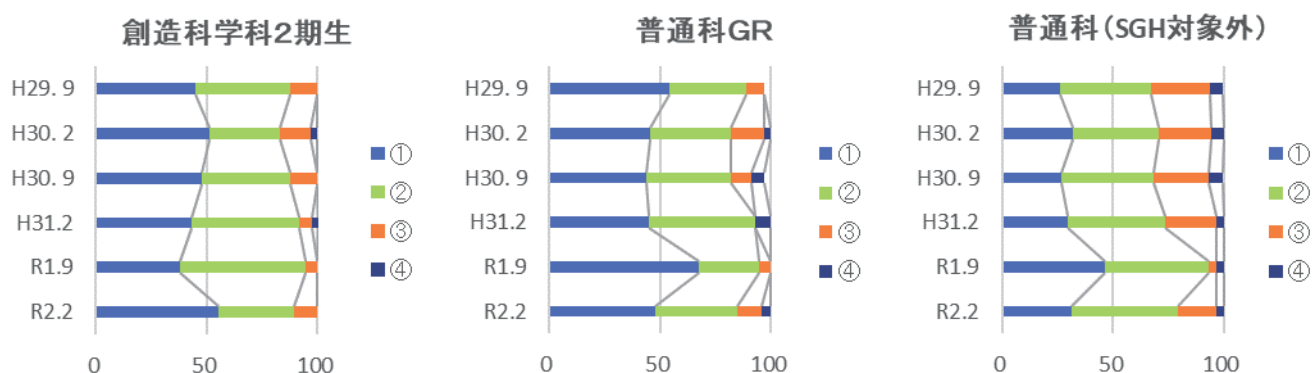
質問 1：地域社会が抱える社会問題に興味がある



質問 2：国際社会が抱える社会問題に興味がある



質問 3：日本の文化について興味がある



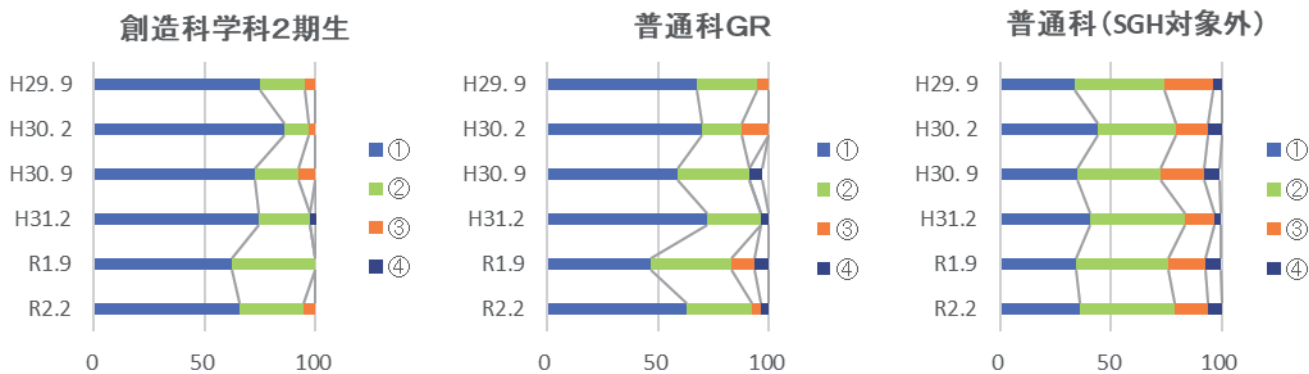
以下の質問に①～④の選択肢から答えさせた。

① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ あまりそう思わない ④ そう思わない

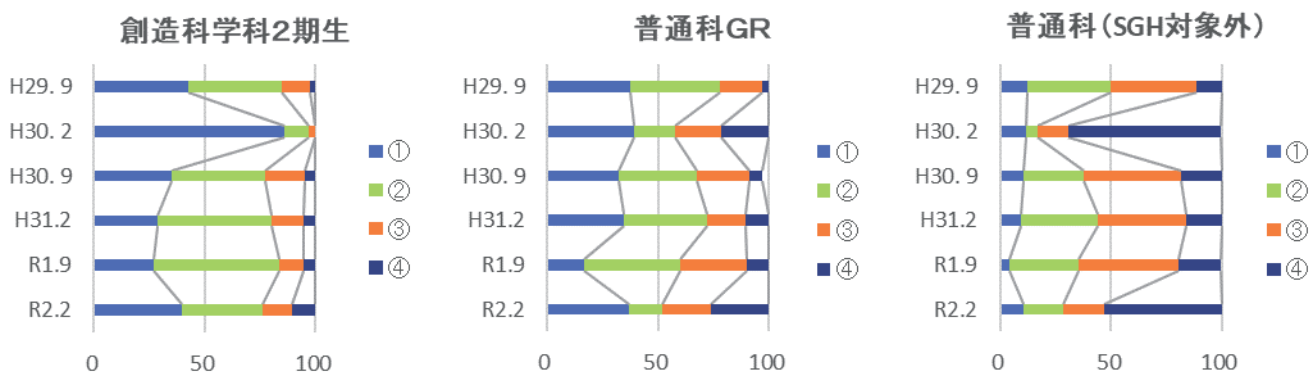
※ 創造科学科2期生：SGH対象（40名） 普通科GR：普通科グローバルリサーチ受講生（SGH対象）（40名）

普通科(SGH対象外)：SGH対象外生徒（約240名） ※ 数値の単位は%

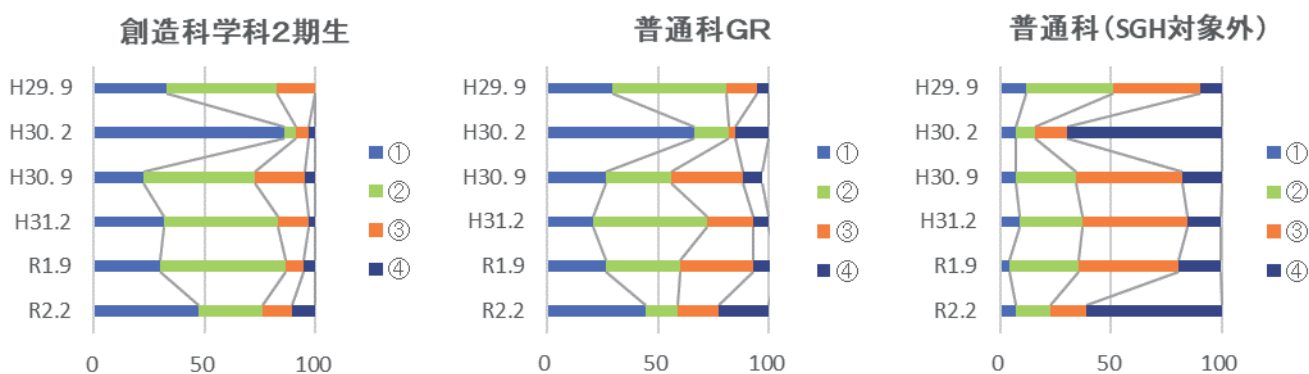
質問4：外国の文化について興味がある



質問5：高校時代に、社会貢献活動（ボランティア活動等）に取り組みたい



質問6：高校時代に、自己研鑽活動（大学でのセミナー等への参加）に取り組みたい



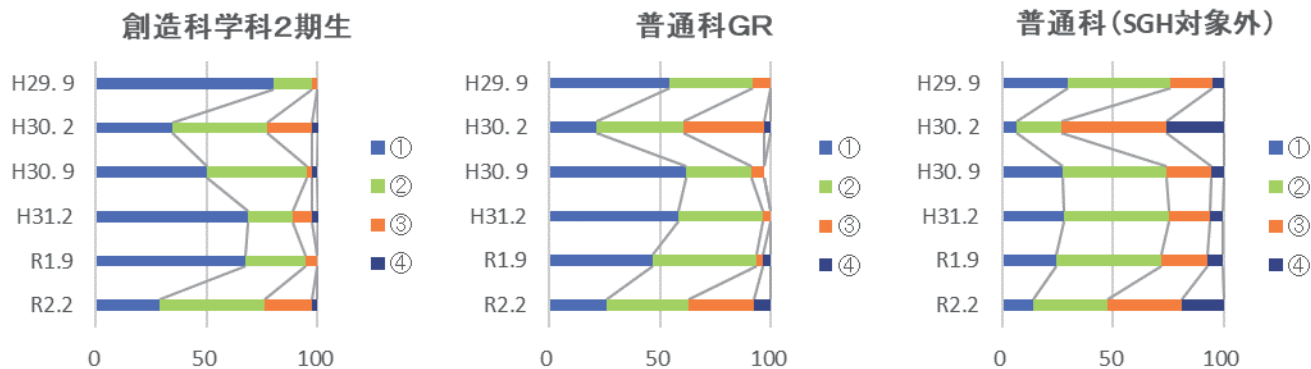
以下の質問に①～④の選択肢から答えさせた。

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない

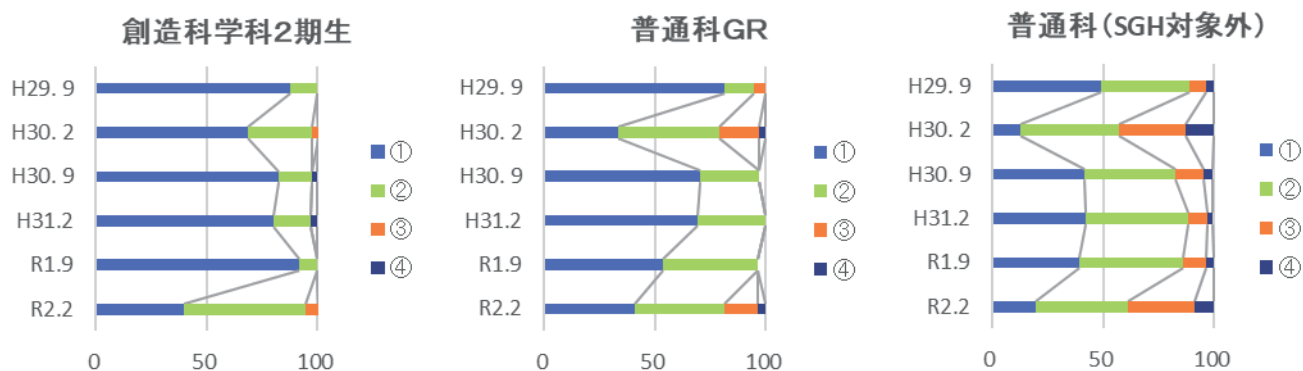
※ 創造科学科2期生：SGH対象（40名） 普通科GR：普通科グローバルリサーチ受講生（SGH対象）（40名）

普通科(SGH対象外)：SGH対象外生徒（約240名） ※ 数値の単位は%

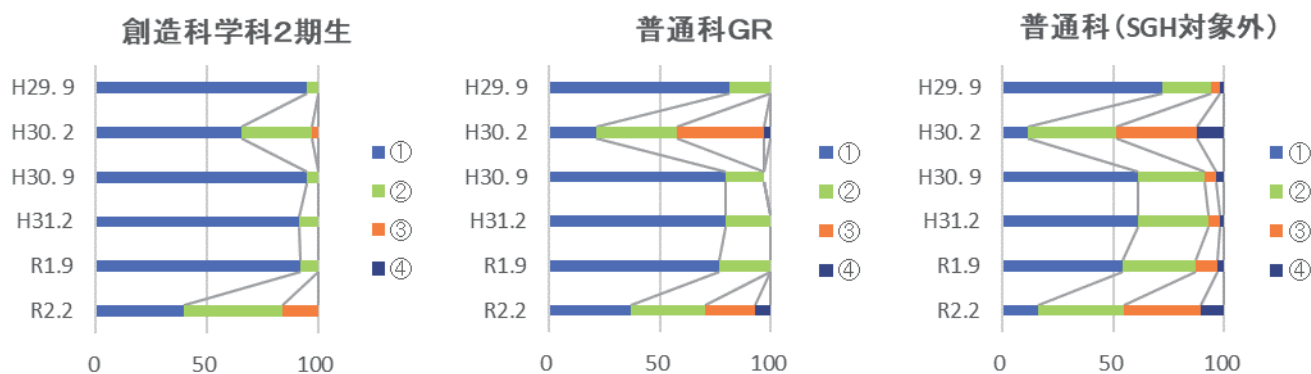
質問7：高校時代に、リーダーシップを身に付けたい



質問8：高校時代に、主体性を身に付けたい



質問9：高校時代に、英語運用能力を高めた



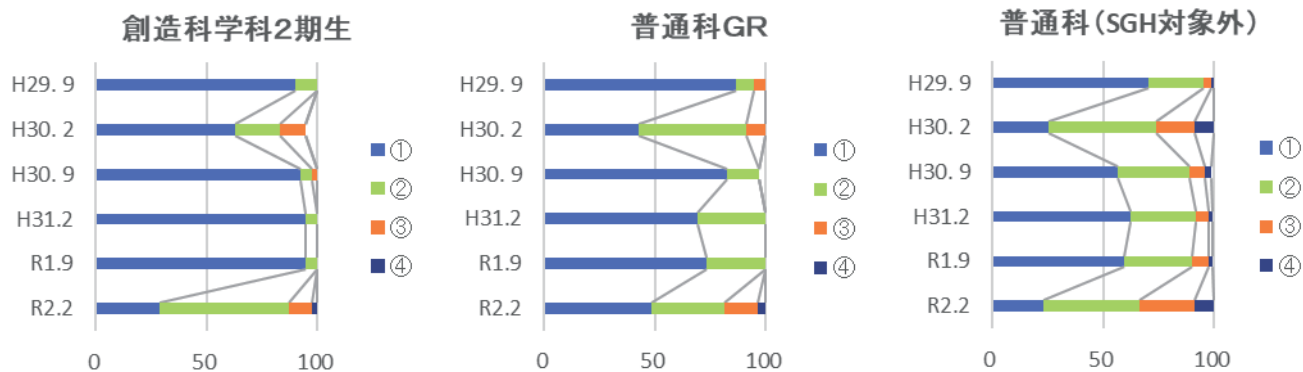
以下の質問に①～④の選択肢から答えさせた。

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない

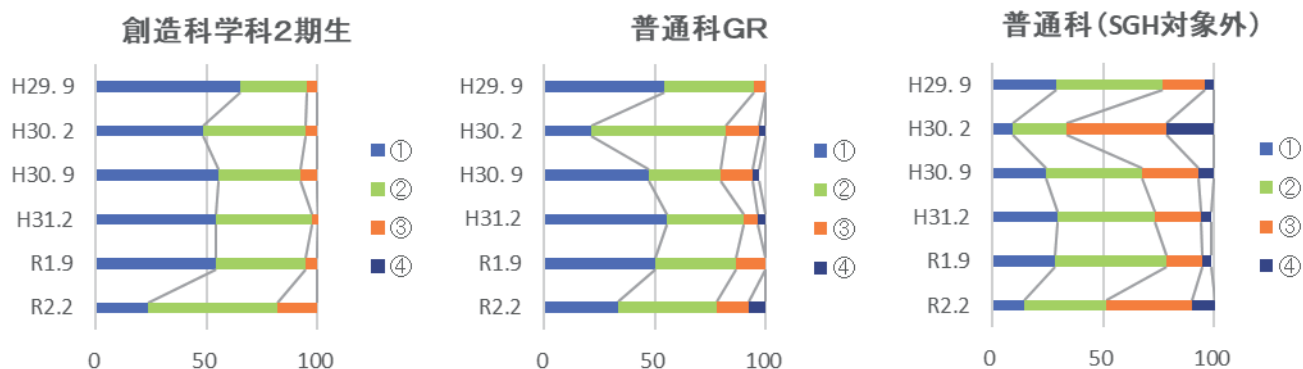
※ 創造科学科2期生：SGH対象（40名） 普通科GR：普通科グローバルリサーチ受講生（SGH対象）（40名）

普通科(SGH対象外)：SGH対象外生徒（約240名） ※ 数値の単位は%

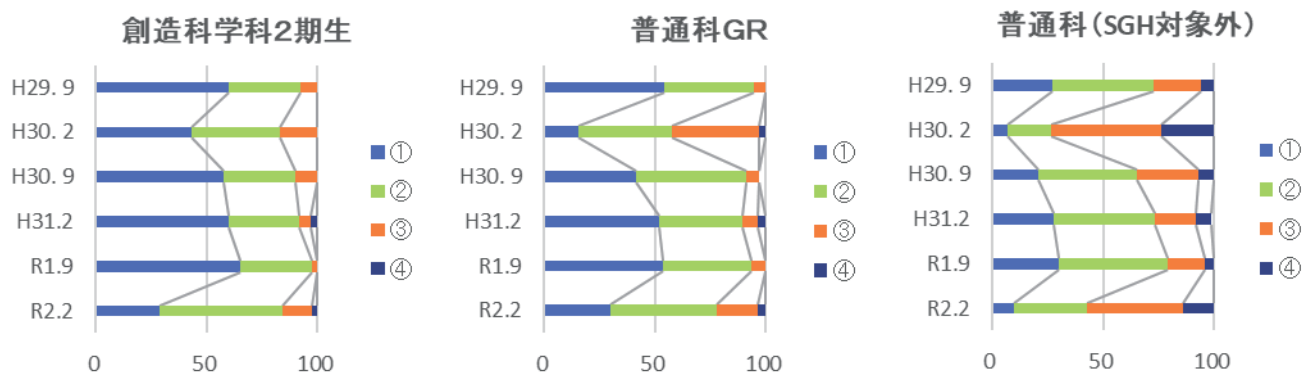
質問10：高校時代に、コミュニケーション能力を高めたい



質問11：高校時代に、社会において解決すべき課題が何かを見極める能力を高めたい



質問12：高校時代に、社会で見つかった課題を解決する能力を高めたい



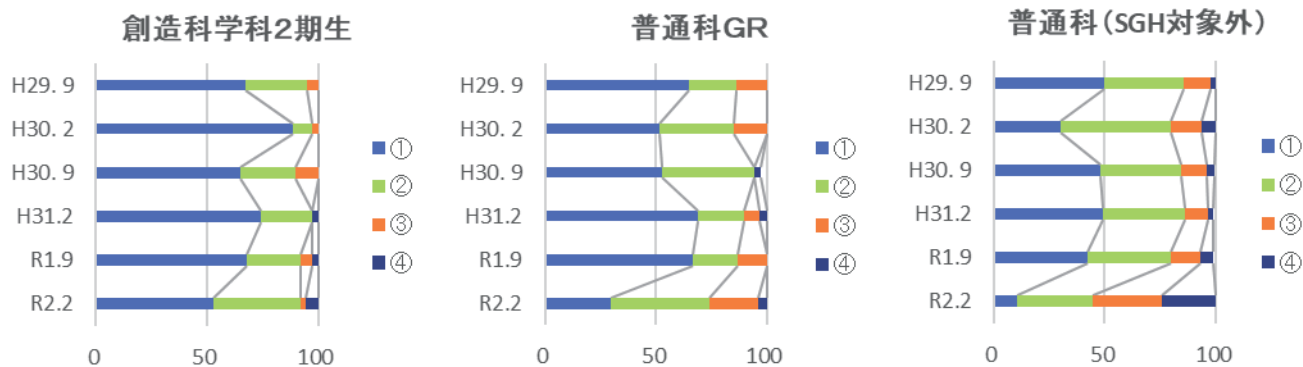
以下の質問に①～④の選択肢から答えさせた。

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない

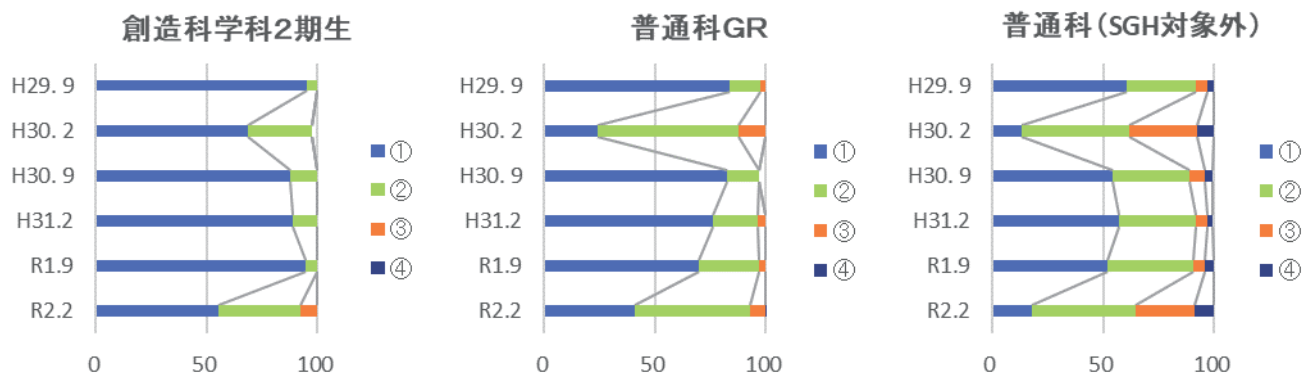
※ 創造科学科2期生：SGH対象（40名） 普通科GR：普通科グローバルリサーチ受講生（SGH対象）（40名）

普通科(SGH対象外)：SGH対象外生徒（約240名） ※ 数値の単位は%

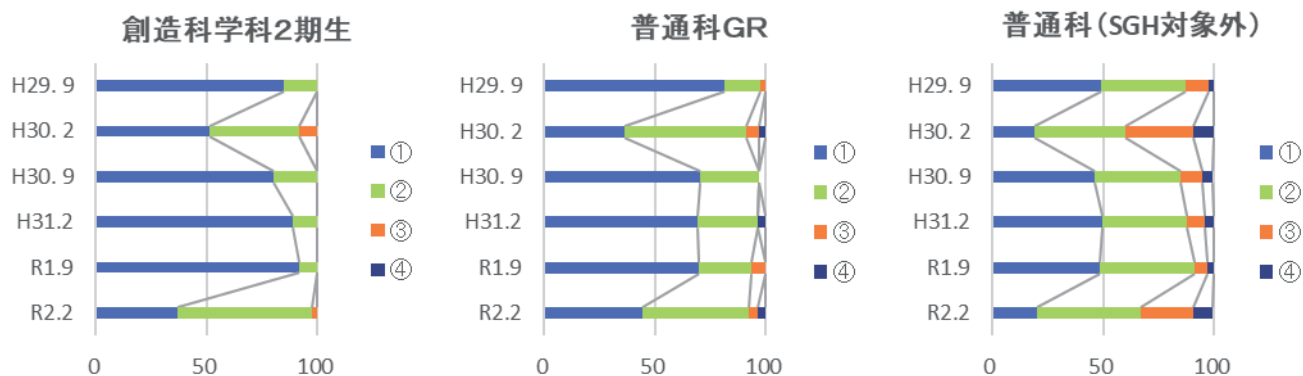
質問13：高校時代に、コンピューターの活用能力を高めたい



質問14：高校時代に、相手にわかりやすく伝える能力を高めたい



質問15：高校時代に、さまざまな角度から物事を客観的にとらえる能力を高めたい



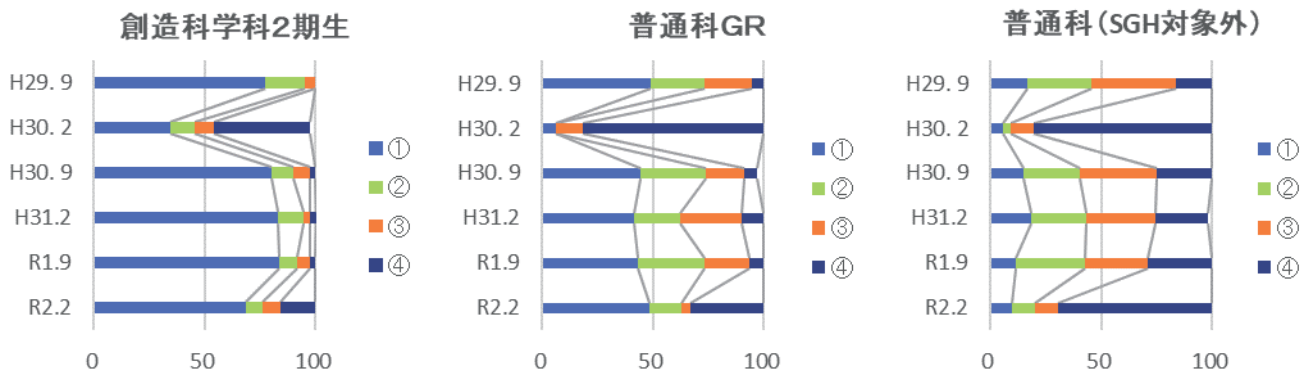
以下の質問に①～④の選択肢から答えさせた。

① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ あまりそう思わない ④ そう思わない

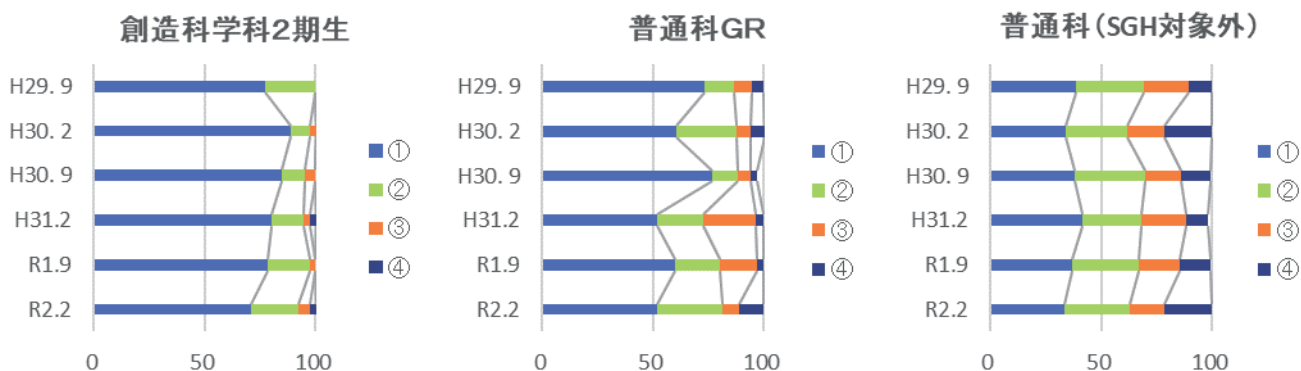
※ 創造科学科2期生：SGH対象（40名） 普通科GR：普通科グローバルリサーチ受講生（SGH対象）（40名）

普通科(SGH対象外)：SGH対象外生徒（約240名） ※ 数値の単位は%

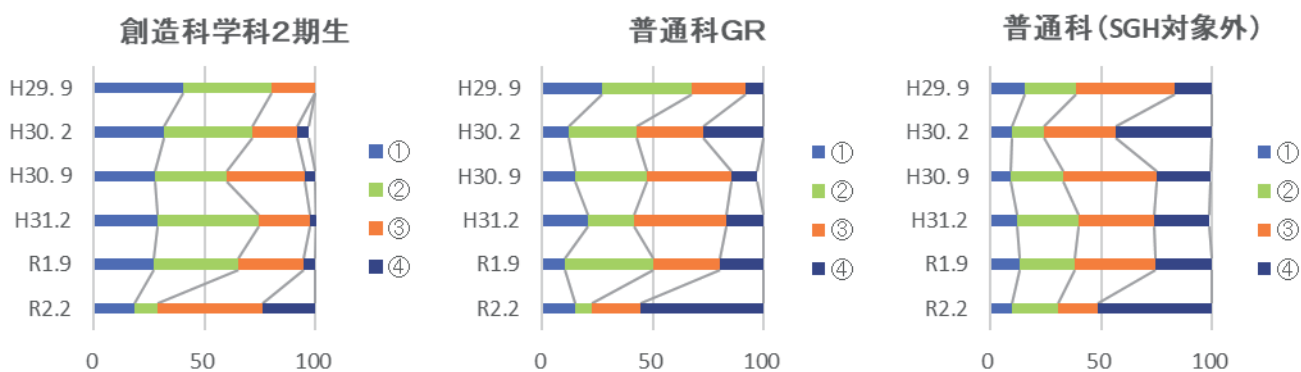
質問16：高校在学中に、留学や海外研修に行きたい



質問17：大学在学中に、留学や海外研修に行きたい



質問18：将来、国際化に重点を置く大学（スーパーグローバル大学等）へ進学したい



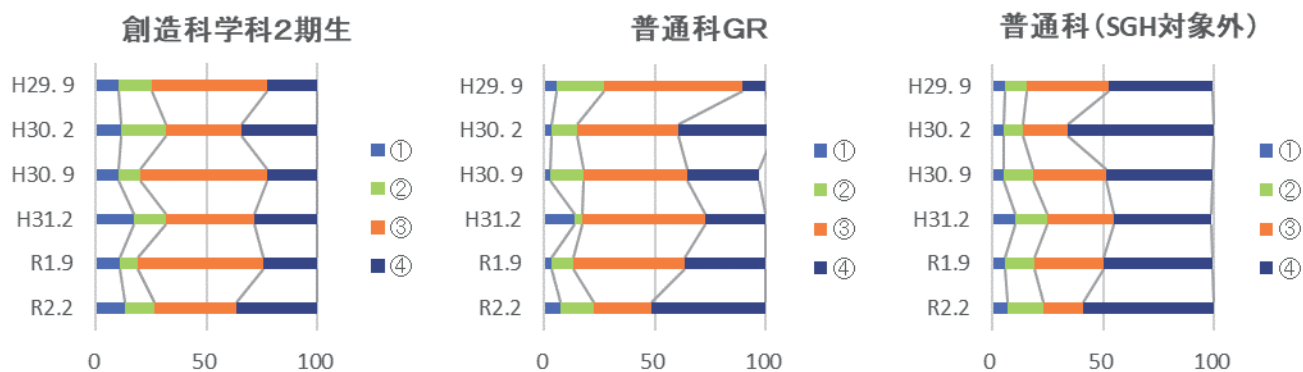
以下の質問に①～④の選択肢から答えさせた。

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない

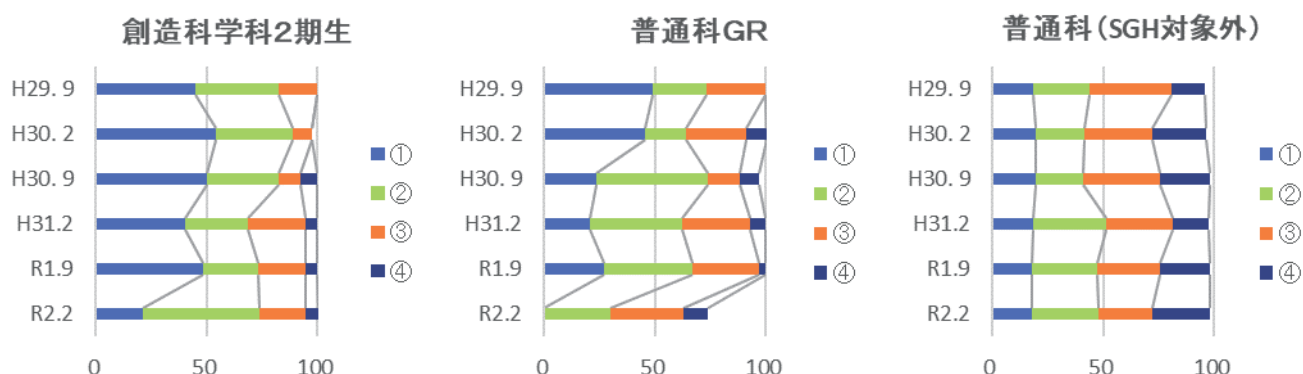
※ 創造科学科2期生：SGH対象（40名） 普通科GR：普通科グローバルリサーチ受講生（SGH対象）（40名）

普通科(SGH対象外)：SGH対象外生徒（約240名） ※ 数値の単位は%

質問19：将来、海外の大学へ進学したい



質問20：将来、仕事で国際的に活躍したい



<注意点>

R2.2（高校卒業時点）のアンケートにおいては、高校における学習を全て終えたという前提で、一部の質問の問いかけを変えている。

<例>

質問 5：高校時代に、社会貢献活動（ボランティア活動等）に取り組んだ

質問 7：高校時代に、リーダーシップを身に付けた

質問16：高校在学中に、留学や海外研修に参加した

上記理由により、アンケート質問の問いかけが R2.2 の数値に影響していると考えられる。

<分 析>

(1) 創造科学科生の大きな達成感（ほぼすべての質問において）

昨年のアンケート結果とは異なり、3年間の学びを通じて創造科学科生の達成感が大きい。特に、質問1～4が示すように入学当初から社会や文化に興味関心が高く、多くのSGHプログラム（授業等）を通じて主体的に学んだ結果、後述するように多様な能力を高めることができたとして自己評価する生徒が多いのは大きな成果である。SGH事業に最も支援された創造科学科40名が学びの成果を肯定的に捉えていることが、SGH事業5年間の集大成を示している。

(2) 高校3年間を通じての自律的活動力の向上（質問5、6）

3年間を通じて自分そして社会のために主体的に活動したいという意欲が高く、卒業時には自己肯定できる生徒が例年以上に多い。1年時である平成30年2月の創造科学科生、普通科GR生のデータより、外部講師による講義や探究活動、新聞ワーク等SGHプログラムでの学びを通じて意識を高めたことがわかる。最終的に、卒業時である令和2年2月のデータが示すように、SGH事業を通じて本校が目指す「未来の創造者」に必要と考える4つの力のひとつ「自律的活動力」を伸ばしたと感じている生徒が多くなり、4つの力の育成を目指している本校の狙いが、生徒たちに浸透しているように感じる。

(3) 多様な能力の育成（質問7～15）

上述の4つの力のうち、「社会創造力」（質問7～12）、「科学的思考力」及び「複眼的思考力」（質問13～15）についても、普通科生（SGH対象外）と比較すると、創造科学科生、普通科GR生の能力が育成されているのがわかる。特に、創造科学科生は1年時に社会科学・自然科学2つの探究活動を経験することで、課題を発見し解決する能力（質問11、12）や相手にわかりやすく伝える能力（質問13、14）の重要性を肌で感じ（平成30年2月のデータ）、さらに内容を深めた2～3年次の探究活動において科学的そして複眼的に考える力（質問15）を伸ばしたいと実感したようである（平成30年9月～平成31年2月のデータ）。また、この時期は普通科GR生も本格的に探究活動に取り組んだ時期であり、多くの生徒がこれらの能力を高めたいと感じていることを数字が示している。SGH事業における探究活動の実践が、社会における正解のない問題に向き合い、解決し、伝えていくうえで非常に重要であることに気づいていることも、大きな学びの成果といえるだろう。

(4) 海外進出に向けた高いモチベーション（質問16～20）

昨年同様、兵庫高校における海外研修のチャンスを生かせる創造科学科生と普通科GR生は、質問16、17からもわかるように海外で学びたいという意欲が高く、在学中にSGH事業によるイギリス研修やベトナム研修に参加して、大きな成果を得た生徒も多い。特に、創造科学科生のほぼ全員が大学進学後に海外へ進出したいと考えていることも、SGH事業の目標を概ね達成しているといえるだろう。しかしながら質問18、19が示すように、昨年同様大学進学において海外進出を考える生徒は相変わらず少ないようで、SGHプログラムでの学びを外国の大学進学という形で海外での学びに繋げるという課題を解決するに至っていない。また、質問20にある将来仕事として海外に目を向ける生徒が昨年よりも増えているところは、SGH事業を終えるにあたり、長期的な視野で“世界へはばたく「未来の創造者」の育成”という目的を果たせたものと考えられる。

(3) 英語外部検定試験の活用と結果

① 令和元年度3年生の結果

2年生12月に受験したTOEFL Juniorのスコアと3年時までに受験した実用英語検定の結果を活用してデータを作成した。TOEFL Juniorのスコアが2年時に695点以上の生徒で実用英語検定2級を受験した者が合格しており、2年時にTOEFL Junior 695点以上の生徒をCEFR B1以上とした。

CEFR B1以上の生徒に関するデータ

		CEFR B1以上の生徒数 (人)	CEFR B1以上の生徒の割合 (%)
学年受験者全体	315名	239	75.8 [40.1]
SGH対象者	74名	70	94.6 [67.5]
創造科学科	40名	39	97.5 [80]
普通科GRⅡ選択者	34名	31	91.1 [54.5]
海外研修参加者	40名	38	95
SGH対象者以外	242名	169	70.1 [40.1]

※ [] は昨年度卒業生における割合

※ 海外研修参加者については今年度のみ調査

<分 析>

- ・英語の運用能力を高める「RRE」の授業や海外研修に参加した生徒の多い創造科学科の生徒の運用能力が飛躍的に伸びた。
- ・海外研修参加者は創造科学科の生徒は全員B1以上で、普通科の生徒もほぼB1以上の運用の能力を身につけることができた。今年初めて追加で調査を行った。
- ・当初の目標設定値（SGH対象者50%、対象者以外40%）を大きく上回ることができた。

※ 実用英語検定については準1級2名、2級54名が取得した。

② 令和元年度実用英語検定

1、2、3年生希望者124名が受験した。大学入試導入の延期および大幅な値上がりにより、受験者が減少した。昨年度2級合格者が準1級にチャレンジしたが、あと少しのところでは不合格となった。

準2級合格 1年生20名 2年生2名

2級合格 1年生11名 2年生19名 3年生2名

準1級合格 3年生1名

平成30年度入学生(73回生)教育課程一覽

平成30年度入学生(普通科) 選は枠内の1科目を選択 ※は特定の期間で実施

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35		
1 学年	科目	国語総合					現代社会	数学 I	数学 II	数学 A	物理基礎	生物基礎	体育	保健	選 書道 I	選 美術 I	選 音楽 I	英語 I	コミュニケーション	英語表現 I	家庭基礎	情報の科学	※ グローバル I	L	H	R	※ 総合的な学習 I	合計	34									
	単位	5					2	2	1	2	2	2	3	1	2	3	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2 学年	科目	現代文 B	古典 B	世界史 A	地理 B	日本史 A	数学 II	数学 B	化学基礎	選 生物探究	選 体育	選 保健	英語 II	コミュニケーション	英語表現 II	※ グローバル II	L	H	R	合計	33																	
	単位	2	3	3	3	3	2	3	1	3	1	5	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3 学年	科目	現代文 B	古典 B	地理 B	世界史 B	日本史 B	倫理	政治	経済	数学錬成 I	数学錬成 II	理科探究	選 体育	選 保健	英語 III	コミュニケーション	英語表現 II	※ グローバル III	L	H	R	合計	33															
	単位	2	3	4	2	3	2	3	2	3	3	2	3	2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
2 学年	科目	現代文 B	古典 B	世界史 A	地理 B	数学 II	数学 III	数学 B	化学基礎	化学	選 生物	選 体育	選 保健	英語 II	コミュニケーション	英語表現 II	※ グローバル II	L	H	R	合計	33																
	単位	2	3	2	2	3	1	2	2	3	3	2	1	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3 学年	科目	現代文 B	古典 B	地理 B	数学 III	数学研究 S	化学	選 生物	選 体育	選 保健	英語 III	コミュニケーション	英語表現 II	※ グローバル III	L	H	R	合計	33																			
	単位	2	2	3	4	3	4	2	3	4	2	3	2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

備考 自由選択科目として、「グローバルリサーチ(グローバル I・II・III)」を設置します
 「グローバルリサーチ」非選択者の単位教合計は表の合計よりも1少なくなります
 始業時刻は8:30 6限の日は14:55終了 7限の日は15:55終了
 次年度以降の教育課程は実施予定であり、今後変更されることがあります

平成30年度入学生(創造科学科) 選は枠内の1科目を選択 ※は特定の期間で実施

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35			
1 学年	科目	国語総合					理数数学 I	理数化学	理数物理	理数生物	体育	保健	選 書道 I	選 美術 I	選 音楽 I	英語 I	コミュニケーション	英語表現 I	情報の科学	※ 創造基礎	※ 課題研究	L	H	R	※ 総合的な学習	合計	34												
	単位	5					5	2	2	2	3	1	2	3	2	3	2	2	2	2	2	1	2	3	2	1	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2 学年	科目	現代文 B	古典 B	世界史 A	地理 B	理数数学 II	理数数学特論	理数化学	理数物理	理数生物	選 体育	選 保健	英語 II	コミュニケーション	英語表現 II	家庭基礎	※ 創造応用 I L	L	H	R	合計	33																	
	単位	2	3	3	3	2	1	1	1	2	1	4	2	2	2	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3 学年	科目	現代文 B	古典 B	地理 B	世界史 B	倫理	政治	経済	理数数学 II	理数数学特論	理科探究	選 体育	選 保健	英語 III	コミュニケーション	英語表現 II	※ 創造応用 II L	L	H	R	合計	32																	
	単位	2	3	4	2	3	3	2	3	2	3	2	3	2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
2 学年	科目	現代文 B	古典 B	世界史 A	地理 B	理数数学 II	理数数学特論	理数化学	理数物理	理数生物	選 体育	選 保健	英語 III	コミュニケーション	英語表現 II	家庭基礎	※ 創造応用 I S	L	H	R	合計	33																	
	単位	2	2	2	2	4	2	2	2	2	1	2	1	3	2	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3 学年	科目	現代文 B	古典 B	地理 B	理数数学 II	理数数学特論	理数化学	理数物理	選 体育	選 保健	英語 III	コミュニケーション	英語表現 II	※ 創造応用 II S	L	H	R	合計	32																				
	単位	2	2	3	4	3	4	2	5	2	3	2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

備考 *について:前期(9月まで)創造基礎(B)1時間+※1時間 後期(10月から)課題研究1時間+※1時間で実施します
 始業時刻は8:30 6限の日は14:55終了 7限の日は15:55終了
 次年度以降の教育課程は実施予定であり、今後変更されることがあります

平成31年度入学生(74回生)教育課程一覽

平成31年度入学生(普通科)

選は枠内の1科目を選択

※は特定の期間で実施

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
1 学年	科目	国語総合					現代社会	数学Ⅰ	数学Ⅱ	数学Ⅲ	物理基礎	生物基礎	体育	保健	選 書道Ⅰ	選 美術Ⅰ	選 音楽Ⅰ	英語Ⅰ	コミュニケーション 英語Ⅰ	英語表現Ⅰ	家庭基礎	情報の科学	※ グローバル	LHR	※ 総合的な探究	合計										
	単位	5					2	2	2	2	2	2	3	1	2	3	2	2	2	2	2	2	1	1	1	34										
2 学年	科目	現代文B	古典B	世界史A	地理A	日本史A	数学Ⅱ	数学Ⅲ	化学基礎	化学	選 生物探究	体育	保健	英語Ⅱ	コミュニケーション 英語Ⅱ	英語表現Ⅱ	総合的な探究	LHR	※ 総合的な探究	合計																
	単位	2	3	3	3	3	3	2	2	2	1	3	1	5	2	1	1	32																		
3 学年	科目	現代文B	古典B	地理B	世界史B	日本史B	倫理	政治経済	世界史B	数学Ⅱ	数学Ⅲ	化学	選 理科探究	体育	英語Ⅲ	コミュニケーション 英語Ⅲ	英語表現Ⅱ	総合的な探究	LHR	※ 総合的な探究	合計															
	単位	2	3	4	2	3	2	3	2	3	3	2	3	2	4	2	1	1	32																	

2 学年	科目	現代文B	古典B	世界史A	地理B	数学Ⅱ	数学Ⅲ	数学Ⅲ	化学基礎	化学	選 生物	体育	保健	英語Ⅱ	コミュニケーション 英語Ⅱ	英語表現Ⅱ	総合的な探究	LHR	※ 総合的な探究	合計
	単位	2	3	2	2	3	1	2	2	2	2	3	2	1	3	2	1	1	32	
3 学年	科目	現代文B	古典B	地理B	選 数学Ⅲ	選 数学Ⅲ	選 数学Ⅲ	選 化学	選 生物	選 物理	選 体育	英語Ⅲ	コミュニケーション 英語Ⅲ	英語表現Ⅱ	総合的な探究	LHR	※ 総合的な探究	合計		
	単位	2	2	3	4	3	4	4	4	2	4	2	4	2	1	1	32			

備考 自由選択科目として、「グローバルリサーチ(グローバルⅠ・Ⅱ・Ⅲ)」を設置します
 「グローバルリサーチ」非選択者の単位数合計は表の合計よりも1少なくなります
 始業時刻は8:30 6限の日は14:55終了 7限の日は15:55終了
 次年度以降の教育課程は実施予定であり、今後変更されることがあります

平成31年度入学生(創造科学科)

選は枠内の1科目を選択

※は特定の期間で実施

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
1 学年	科目	国語総合					理数数学Ⅰ	理数化学	理数物理	理数生物	体育	保健	選 書道Ⅰ	選 美術Ⅰ	選 音楽Ⅰ	英語Ⅰ	コミュニケーション 英語Ⅰ	英語表現Ⅰ	情報の科学	創造基礎	※ RRE	※ 課題研究	LHR	※ 総合的な探究	合計											
	単位	5					5	2	2	2	3	1	2	3	2	2	2	2	1	2	2	2	1	1	1	34										
2 学年	科目	現代文B	古典B	世界史A	地理A	日本史A	理数数学Ⅱ	理数数学特論	理数化学	理数物理	理数生物	体育	保健	英語Ⅱ	コミュニケーション 英語Ⅱ	英語表現Ⅱ	家庭基礎	創造応用ⅠL	※	LHR	※ 総合的な探究	合計														
	単位	2	3	3	3	3	2	1	1	1	2	1	4	2	2	5	1	33																		
3 学年	科目	現代文B	古典B	地理B	世界史B	日本史B	倫理	政治経済	世界史B	理数数学Ⅱ	理数数学特論	選 理科探究	選 体育	英語Ⅲ	コミュニケーション 英語Ⅲ	英語表現Ⅱ	創造応用ⅡL	LHR	※ 総合的な探究	合計																
	単位	2	3	4	2	3	3	2	3	3	2	3	2	3	2	2	2	1	32																	
2 学年	科目	現代文B	古典B	世界史A	地理B	理数数学Ⅱ	理数数学特論	理数化学	理数物理	選 理数生物	選 理数生物	選 体育	選 保健	コミュニケーション 英語Ⅱ	英語表現Ⅱ	家庭基礎	創造応用ⅠS	※	LHR	※ 総合的な探究	合計															
	単位	2	2	2	2	4	2	2	2	2	1	2	1	3	2	2	3	1	33																	
3 学年	科目	現代文B	古典B	地理B	理数数学Ⅱ	理数数学特論	理数化学	選 理数生物	選 理数生物	選 理科探究	選 体育	英語Ⅲ	コミュニケーション 英語Ⅲ	英語表現Ⅱ	創造応用ⅡS	LHR	※ 総合的な探究	合計																		
	単位	2	2	3	4	3	4	5	2	3	2	3	2	2	1	32																				

備考 *について:前期(9月まで)創造基礎(B)1時間+※1時間 後期(10月から)課題研究1時間+※1時間で実施します
 始業時刻は8:30 6限の日は14:55終了 7限の日は15:55終了
 次年度以降の教育課程は実施予定であり、今後変更されることがあります

② 第1回 SGH 運営指導委員会 議事録

日時：令和元年9月9日（月）14：00～16：00

場所：県立兵庫高等学校 校長室

出席者：水山委員，廣岡委員，森島委員，泉委員，辻主任指導主事
升川校長，伊藤教諭，大前教諭，大澤教諭，窪田教諭，佐井教諭

1 開会挨拶

- ・兵庫県立兵庫高等学校 升川 清則 校長

SGH 事業は5年目の総まとめ。来年度以降の方向性についてもご意見を頂きたい。

- ・兵庫県教育委員会事務局高校教育課 辻 登志雄 主任指導主事

2 出席者紹介

3 平成30年度の報告・令和元年度課題研究等の実施状況について【窪田教諭】

・昨年度報告

SGH 事業としてこれまで4年間活動してきた。

学科の生徒は外部講師や大学との連携等により充実した教育環境が整ってきている。

一つの到達点に達しているのではないかと。

1年生で外国人留学生との交流があり、2年生で海外研修という流れもある程度の到達点に達しているのではないかとと思われる。

・グローバルリサーチについて

40名を普通科から選抜。創造科学科のエッセンスを取り入れている。

グローバルリサーチも5年目に入り、取り組みが認められてきた。

灘の酒蔵をインバウンド計画という形で外国人観光客にアピールをするというものにおいても、SNSなどを活用して発信している。

携わった生徒が観光大使に任命されている。

普通科の生徒もSGHをきっかけにして探究活動や海外に視線を向けるということが成果として出てきている。

・令和元年度研究テーマについて

海外や国内に住んでいる外国人に目を向けて、海外にどのようにして発信していくのかということも以前に比べると多くなってきている。

【大前教諭】

外部で評価されて、賞を受賞するようなどころまで到達する生徒が普通科グローバルリサーチの生徒からも出てきた。

【大澤教諭】

自然科学（IS）から、泥を活用した電池の研究を行った班が学会で賞を受賞した。今までにはなかったことである。

【水山委員】

海洋プラスチックの問題の研究をしてみてはどうか。分解としては理系であり、ごみ問題としては文系の問題として進められるのではないかと。

【大前教諭】

尼崎小田高校と県立神戸商業高校がすでにプラスチックごみに関しての研究をしていて、すでに有名である。

4 新しい事業指定に向けて 【大前教諭】

文科省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業グローバル型」の指定を受けることで本校の取り組みが活きるのではないかと考える。

今回の申請はsociety5.0を意識した形で申請書を書く。

AI 技術が発達し、仕事や働き方が変化していくという社会に対応できるような教育。地域振興の核となる学校。地域から流出するのではなく、地域に戻ってくるようなシステムの構築。現在、素案を考えている段階である。

神戸は医療産業都市でもあるが、連携しながら何かできないか。

神戸大学が科学技術を用いて地方創生を目指そうというプロジェクトに兵庫高校も参加させていただく。

提出が 2 月なので 12 月末には書類を整えたい。

構想名に入れる文言のキーワードなどの意見を伺いたい。

【辻主任指導主事】

WWL 指定は全国で 10 校。兵庫県内では 2 校。

現在、グローバル型は柏原高校が指定を受けている。

地域の課題を考えることで海外の課題を考える。

その活動を行うことでどういう生徒を育成できるか、その育成をするためにはどういうことが必要かということを考えなくてはならない。

グローバル型不採択だった学校はテーマがバラバラでいろいろなことをしていた。

採用された柏原高校は大きなテーマをもってそこに繋がるような書き方をしていた。

【廣岡委員】

今まで兵庫は生徒たちがグローバルに出ていくというイメージでやってきた。

地域に根付くというグローバル型は兵庫の生徒の意識と乖離はないのか。

【大前教諭】

グローバルリーダーの育成というのは兵庫高校の目指すところであるので、申請書の書き方の問題だと考えている。

基本的には海外に目を向けて、グローバルに活躍できる人材育成を目指す。

【水山委員】

兵庫の課題は？神戸の課題は？ということ突きつめて書いておかないといけない。

神戸にとっては外で活躍してくれたら、地域に帰ってこなくてもよい。

そのあたりについて神戸市役所とよく連携を取ることが大事。

【升川校長】

WWL もそうだが管理機関の役割が明確にされている。

グローバルな視点を持った人材を育てつつ、地域に還元できる人材を。

【辻主任指導主事】

長田区をもう少し出して申請書を書ければと思う。長田区と連携協定を結んでいるだけでは弱い。

【廣岡委員】

長田区や兵庫区の活性化だけでは弱い。せめて神戸市。

【水山委員】

地方は県の出張職員が高校にいて、連携・協働の核になっている。

兵庫県ではそういうことができるのかと聞くと、曖昧な回答だった。

【泉委員】

神戸に帰ってこなくても、広い地域から神戸を支える力があってもいい。

どこにいても活躍できて、いずれ戻ってくるような人材を。

小中学校との関わりは？

朝鮮学校とかインターナショナルな関わりはないのか。

【大前教諭】

体験授業などで SGH に関係する授業を体験してもらっている。

朝鮮学校等インターナショナルな学校との関わりはまだない。

【辻主任指導主事】

小中学校との連携はそんなにずっとできるものではない。やったことを書けばよい。

【大澤教諭】

地域魅力型とグローバル型の決定的な違いは何か。

【辻主任指導主事】

地域魅力型は、地域を支える人材育成。地域に残ってほしい。過疎地域についての人材育成。グローバル型は、地域を支える人材をというが、地域に帰ってきてというものではない。どこにいても地元を支えることができる。

県全体として考えるのではなく、地域を限定した方がいい。

連携先としては県では内容がぼやけてしまうのでそこまで大きくしない方がいい。

育成したい人材のテーマが大きくあれば、そこに結び付けられればいい。

【廣岡委員】

「都市型グローバル」でないといけない。

今までの取り組みとしては WWLの方が近いのではないか。

【水山委員】

WWLはやらないということだが、WWLの方が今までの兵庫に合っているのではないか。

【伊藤教頭】

文部科学省の話聞いて難しいということが分かった。

【辻主任指導主事】

高大連携が障害になっている。

【森島委員】

学校の目的とするところと、提携しようとしている市町村や都道府県との本分はかなり違うと思う。

お互いの本分を確かめた上で協力するかを考えないとぼやけてしまう。

生徒には星雲の志を持って世に出て行ってほしい。

これまでやってきた SGHの方が生徒に合っていたのでは。

グローバルな視野を持ち、ローカルな仕事も行う。

海洋プラスチックというテーマはいいプロジェクトで、具体性もあり、グローバルでありローカルだ。

【水山委員】

「長田から」を「神戸から」にしてもグローバルではある。

地域課題の解決というところがしっかりしていないといけない。

地域課題が明確に見えてこない。

【窪田教諭】

この話の違和感は前提が society5.0 だということにある。

都市型グローバルとなると高度情報社会に仲間入りしてくる。

高度情報社会自体が世界と繋がることになる。

神戸市の人口減少は大きな問題である。

神戸市は大阪・京都とは違う都市モデルを考えている。

神戸市はヒューマニズムをベースとした街づくりを目指している。

神戸市は航空産業をやりたいとも言っている。

【森島委員】

「神戸も、そして世界も」というような言い回しはどうか。

【窪田教諭】

SDGsに「誰も取り残さない」という考え方がある。

【水山委員】

これまでこのような子供を育ててきたから、その生徒を伸ばすためにはこれが必要だという風に書きたい。成果を強調する形で書かれた方がいいのでは。

【大前教諭】

WWLは残っている課題が明確なので書きやすいが、グローバル型は書きにくい。

【泉委員】

本日発表した3人の発表を聞いていると感性や人間力を感じたので、そのあたりを培うということを出しては。

【水山委員】

ヒューマンという言葉はどこかに入れるといい。

【森島委員】

Society5.0の最初の社会像としてAI技術の発達と人間の強みが書いてあるが、こういうことを課題として意識しながら書くと良い。その中で面白いものにお金を出すからということであるので、これには対処しなければいけない。

いくらAIが発達しても人間の強みとして、人間がAIを支配していかなければいけない。そういう人間を育ててきたということを強調して書いていきたい。

【大前教諭】

課題先進国という言葉はSGH申請時には入れた。

【廣岡委員】

グローバルに出ていった人が兵庫に帰ってきてグローバルに活躍し、還元する。グローバルになった人が地域ともかかわりを持ち、絶えずグローバルに還元する人間として広げることができるといふ拠点校になるよう目指してほしい。

【水山委員】

授業の中でOBの話の聞ける機会を設けて、それを単位として認定できる方法があれば。べったり帰ってきてしまうとせっかくの人材が地域に埋もれてしまう。みんながスポット的に帰ってくるとよいのでは。

【廣岡委員】

「未来創造都市神戸を担い、兵庫を支える。」

【窪田教諭】

SGH前は長田を元気にしようというテーマだったのが、現在は未来創造都市神戸をという風に変えてきている。

5 生徒発表

(1) 令和元年度イギリス研修に関する報告【3期生 岩田】

訪問先すべてに生徒が作成したポスターを配布した。

事前・事後の学習もできている。

(2) 令和元年度ベトナム研修に関する報告【3期生 友成】

JVSは兵庫県が関わりのある送り出し機関だったので県にお願いして訪問した。

(3) 令和元年度東京みらいフロンティアツアーに関する報告【GR I 景山】

6 その他

【辻主任指導主事】

兵庫高校としては大学もたくさんあるので周りを結構固められている。

【水山委員】

これまでこういう子供を育ててきたということは書いていってほしい。コーディネーターをしっかりと指定している方が採択しやすい。

【廣岡委員】

今までの学びをどう繋げるか。タイトルに入れにくいのであれば中身に。

【森島委員】

ここまで育ててきた。さらに育てていきたいということを入れたい。世界の問題を解決しようということは地域の問題を解決することに繋がる。

【泉委員】

5年間の取り組みでほぼ完成形になってきているのではないかと。What・How・Whyでどういう人材を求めて何をやっていくのか、なぜそれが必要なのか。引き続き指定されるように、書き方を頑張ってもらいたい。

7 閉会挨拶

県立兵庫高等学校 升川 清則 校長

各委員のご意見を参考に、これまで以上のことをしていきたい。